

コロナ禍による遠隔授業期間中での大学生の自発的ポジティブ行動（第二報）

— 対面授業への復帰と外出自粛の長期化に伴う意識の変化 —

重松 幹二*

戸高 昌俊**

コウハクル ワサナ***

土山 真未****

Voluntary positive behavior of students in the period of online classes of university due to COVID-19 (Part 2) – Consciousness changes by returning to face-to-face classes and under stay-at-home orders –

SHIGEMATSU Mikiji*

TODAKA Masatoshi**

KOWHAKUL Wasana***

TSUCHIYAMA Mami****

要約

コロナ禍による2020年遠隔授業の1年後からその翌年の外出自粛期間にかけて、大学生に「コロナ禍で頑張ったこと」を尋ねる自由記述アンケートを行い、自発的に行ったポジティブな行動を調査した。調査時期が異なる計3回の調査はいずれも回答率が約8割と高く、自分が頑張ったことに対して「多くを語りたい」「ぜひ聞いて欲しい」という気持ちが継続していると解釈した。内容は、「卒業後の準備」「大学生活の充実」「趣味・スポーツ」がほぼ同数で、合計で85%を占めた。遠隔授業1年後の調査では3～4年生の4割が就職活動などの卒業後の準備に力を入れたと回答したが、2年経過後には半減した。2年目になるとコロナ禍が日常化し、危機感が遠のいてしまったと思われる。大学生活の充実については、1年目は約1/6と少なかったが、1年半後には約1/3と倍増した。多くの記述は、改めて自分と向き合ったり、他人を頼りにしないなどの意識変化を述べたものであった。特に1～2年生は友人とのコミュニケーションを望む記述が多く、大学生活を良いものにしたいとの気持ちが強かった。趣味やスポーツを答えた者のうち、新しい趣味を始めた者は1/3近かつ

* 福岡大学工学部教授

** 福岡大学工学部助教

*** 元福岡大学工学部助教（現京都大学工学基盤教育研究センター講師）

**** 福岡大学大学院工学研究科博士課程後期

た。コロナ禍1年目こそ筋肉トレーニングなどひとりで行うものが多かったが、外出自粛が緩和されるにつれてゴルフや釣り、ツーリングやひとり旅など、感染を避けつつ外で楽しむ行動へのシフトが見られた。また、一人暮らしで料理に挑戦したという回答もあれば、家族と一緒に料理を行い家族のありがたみを知ったと回答した者も多かった。ひとりで生きていく力を自覚した面と、家族とのつながりを再確認できた面で、料理に二面性があることは興味深い。

Abstract

From one year after the start of online classes of university in 2020 due to COVID-19 to the following year under stay-at-home orders, the open-ended questionnaire to university students asking "What did you do the best during COVID-19 crisis?" was conducted. In all three surveys, the response rate was high at about 80%, and it was interpreted that the feeling of "I want to talk more" and "I want someone to listen to me about how do I works hard." About the contents, "preparation after graduation", "fulfilling university life" and "hobbies/sports" were almost evenly selected, accounting for 85% totally in responded students. As the answers at one year after the online classes, 40% of 3rd and 4th year students responded about effort into preparations after graduation, but dropped by half after two years later. It seems that the COVID-19 disaster has become a daily occurrence and the crisis sense to job hunting has faded away after second year. The reply to the actions fulfilling university life, it was low at approximately 1/6 in the first year, but was doubled to near 1/3 after one and half years. Many of the responses described changes in consciousness, such as facing oneself again and not relying on others. Particularly, many of the 1st and 2nd year students stated strong desires that they want to communicate with friends, and that they should make their university life better. Almost 1/3 of students who answered hobbies or sports had started new ones. In the first year under COVID-19, many students had done alone, such as muscle training, but as the refraining from under stay-at-home orders was eased, there was shifted to activities such as golf, fishing, bike touring, and traveling alone while avoiding infection. Furthermore, there were some answers that they tried cooking while living alone, while others answered that they realized the value of family by cooking with them. It is interesting to note that cooking has two sides, one is to realize oneself ability to live alone and the other is to reconfirm the communication with their family.

1. はじめに

2019年暮れに発見され 2020年初頭から今日まで世界中で猛威を振るっている新型コロナ

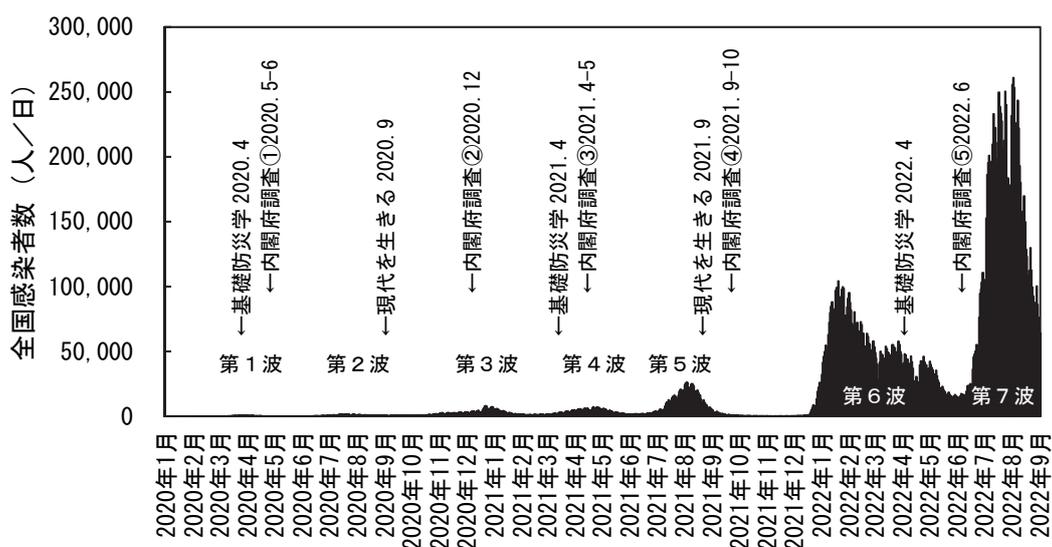


図 1 国内における新型コロナウイルス感染者数の推移 (NHK 特設サイト新型コロナウイルス <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/>の公開データから作図)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、この論文を執筆している 2022 年 9 月現在で国内感染者は 2 千万人を突破し、第 7 波を乗り切ったとはいえ未だ終息に至っていない。ワクチン接種が普及したため重症化率は低下し、行動制限は厳しくないものの、変異株のため国内感染者数が一日に 250,000 人を超えた日もあり、マスク着用や手指消毒は継続して行われている。新型コロナウイルスによる緊急事態宣言は 2020 年 1 月に首都圏を皮切りに全国に拡大し、同年 9 月まで続いた。この間、大学は前期の授業期間であったが、リモート授業やオンデマンド授業などの遠隔授業で実施された。2020 年 9 月からの後期の授業からは、遠隔授業と対面授業が各大学の判断で実施された。その後 2021 年度以降はほぼ対面授業に戻ったものの、マスク着用や手指消毒など、感染に充分配慮しながら実施されている。

コロナ禍の大学生への影響について、当初は遠隔授業の功罪や生活への悪影響に関する調査が重点的になされ、不安やデメリットを危惧する報告が多かった。しかし、時間が経つにつれてメリットやポジティブな意識変化についての報告もみられるようになってきた。以下、コロナ禍におけるポジティブな行動に関する報告を、調査実施日の時系列順で紹介する。図 1 に、今日までの全国における感染者の推移を、主な調査の実施日とともに示す。

コロナ禍当初から内閣府は、ほぼ半年毎に生活意識や行動の変化に関する全国調査を行い、順次公開している (内閣府 2020a, 2020b, 2021a, 2021b, 2022)。その調査項目のひとつに「新しいことへの挑戦や取組」を複数選択するものがあり、第 1 回調査 (2020 年 5 月) では全体の約半数が、特に 10~20 歳代 (ただし学生とは限らない) では 2/3 以上が何らかの新たな挑戦や取組を行ったと回答している。10~20 歳代では「本格的な趣味 (芸術、料理等)」「教育・学習 (新しい分野、技術、語学等)」「オンラインでの発信 (YouTube 等)、オン

ラインでの交流 (Zoom 等)」をそれぞれ 2~3 割の者が答えており、これらは 30 歳代以上の世代よりも高値であった。ただし、自発的に始めたものとやむを得ず始めたものが混在しており、趣味を除けば学校や大学での遠隔授業の実施が大きく関係していると思われる。さらには、第 2 回調査(2020 年 12 月)では「新たな挑戦・取組」は 10~20 歳代でも約半数まで減少し、調査が進むにつれてさらに減少傾向にある。これは、時とともに「新たな」との感覚がなくなり新しい生活様式が日常化してきたため、あるいは行動制限の緩和によって以前の日常生活を取り戻しつつあるためと思われる。

中村(2022)は内閣府の集積データを用いて遠隔授業による大学生の学習意欲の変化を解析した。遠隔授業が始まったばかりの第 1 回調査(2022 年 5 月)ではオンラインによるコミュニケーションを新たに始めたことがモチベーションを支えていたこと、遠隔授業に慣れてきた第 2 回調査(2022 年 12 月)では遠隔授業に対する志向が高いほど学習意欲が高いことが示された。これより、キャンパス入構が自由で友人との交流が可能な環境ならば遠隔授業でも学習意欲を高める可能性はあるが、対面授業であっても授業終了後速やかにキャンパスを出なければならぬ施策であれば学習意欲は減退する可能性がある、と指摘している。

川原(2022)は、オンライン授業が始まった 2020 年 6~8 月に、大学生の生活様式におけるポジティブな変化を調査した。そして、人間関係や生活習慣が「存在のありがたみ」や「自己理解」に影響し、その自己理解が「新たな変化・挑戦」を引き出しているとの分析結果を得、それらの因果関係や影響を図解化している。

松本(2022)は、コロナ禍が約半年経過した 2020 年 10 月に調べた大学生の生活時間をコロナ禍前と比較したところ、学習時間や睡眠時間、アルバイト時間はコロナ禍前に比べて有意に長くなっていたが、余暇の時間は減少することなく変化は見られなかったとしている。このことから行動制限はあったものの、コロナ禍に合わせた余暇を楽しむことができていたと推定している。また、山本と樋口(2022)は同時期の 2020 年 10~11 月の調査結果から遠隔授業への適応度とコロナ禍による生活変化の受容度で大学生を類型化し、生活態度や意識の特徴を検討した。その中で、将来自分で起業したいとの意欲が高い学生は、遠隔授業への適応度は高いものの生活の変化を拒絶する類型で、社会を信頼する傾向があることを示している。

田中と奥西(2021)は、コロナ禍が 1 年経過しようとした 2020 年 11 月~2021 年 2 月に大学生に対して、コロナ禍の「否定面」「肯定面」「気づき」を自由記述で求め、さらには「良くなかったこと:良かったこと」の比率を 100 点満点で求めた。自由記述に多く登場した語として、否定面では「授業、オンライン、友達、人、対面」、肯定面では「時間、授業、オンライン、自分、増える」、気づきでは「人、自分、思う、オンライン、授業」が抽出されている。否定面にも肯定面にも共通する語が多く、両面性を持っていることがうかがえる。また、気づきの内容から、自分を振り返る、社会を改めて眺める、平素あったもののありがたみや人との接触の大事さに気づいたと述べられている。なお、否定と肯定の数値平均は、

この調査時期では約 65:35 であったとされる。

岩本と下田(2022)は学生主体の地域活動の状況について、コロナ禍 2 年目である 2021 年 7 月に調査した。この実習活動は 1~2 年生(コロナ禍前は 1~3 年生)が共同で実施する正規科目である。特に 1 年生は入学早々コロナ禍の制約を受けていたが、先輩に頼ることなく今できることを全力で取り組むといった主体性が向上し、ポジティブな意識変化が見られたと述べている。山根(2022)は、学生の健康及び生活に関する前期調査(2020 年 5 月)と後期調査(2021 年 1 月)を比較し、日常生活や経済面に対する不安の減少によって、ポジティブ化の傾向が見られると述べている。

蘭(2022)は、調査時期は明確ではないが、コロナ禍における困難の受け止め方からポジティブな側面を論じている。困難の受け止め方に関する自由記述は大きく 3 段階に分かれ、1 段階目は不安、つらさ、孤独感などのネガティブな感情を表出した学生、2 段階目は困難を受け止め現状を受け入れている学生、3 段階目は現状を受け入れたうえで、できることを探り実行するというポジティブな視点を持った学生であった。そして、4 割の学生が考え方の変化に自ら気づいたと述べ、そこで最も多く使われた言葉が「ポジティブ」であったとされる。また、約 2 割の学生が適応力や忍耐力、行動力が身についたと述べ、実際の行動として約 3 割の学生から新しい趣味や技能への挑戦、時間管理の見直しができたとの回答があったと報告している。

本報は、2021 年 4 月に調査した大学生の自発的ポジティブ行動をまとめた前報(重松ら 2022)の続報として、2021 年 9 月および 2022 年 4 月の調査を加えることで長期化するコロナ禍の途中経過をまとめたものである。なお、本報では以下の論点を中心とした。

- 1) 大学生 3~4 年生を対象とした調査 1~3 による経時変化
- 2) 全学年を対象とした調査 2 内での学年比較
- 3) ひとりでのいることの効用

2. 調査方法

2.1 対象者

対象者は、前報(重松ら 2022)の 2021 年度前期「基礎防災学」の受講者 146 名(調査 1)に加えて、2021 年度後期「現代を生きる(サブタイトル:災害から自分や家族を守る)」128 名(調査 2)、2022 年度前期「基礎防災学」191 名(調査 3)を対象とした。対象学年は、基礎防災学は 3 年生以上、現代を生きるは全学年である。各授業形態の概要を表 1 に示す。

2.2 調査方法

調査は、第 1 回授業に対する小テストである授業内容に関連し成績に反映する 3 択問題十数問の末尾に、成績に反映しない次の自由記述形式の質問に対する回答を求めた。回収は福岡大学の Web 教育システムである FU ポータルを用いて行った。集まった回答は個人が特

表1 本報調査を行った授業の概要と自由記述に対する回答者数

略称	回答期間	科目名	授業形態	対象学年	履修者 (人)	回答者 (人)
	2017～2019年 毎4月	基礎防災学	対面	3～4年生	計634	87
	2017～2019年 毎9月	現代を生きる	対面	全学年	計413	126
	2020年4月	基礎防災学	オンデマンド	3～4年生	137	61
	2020年9月	現代を生きる	ライブ配信	全学年	117	59
調査1	2021年4月	基礎防災学	対面	3～4年生	146	115
調査2	2021年9月	現代を生きる	対面	全学年	128	95
調査3	2022年4月	基礎防災学	対面	3～4年生	191	151

定できないように文章を加工したのち、受講生全員に公開した。

この項目は成績とは関係ありません。防災とも関係ありません。
この1年間どうでしたか？ こんなときだからこそ経験できたこと、挑戦したこと、成功したことなど、あなたのポジティブな気持ちを自由に書いて教えてください。なお内容は、名前を伏せて公表することがあります。

回答率や回答文字数の比較に用いたコロナ禍前である2017～2019年度と遠隔授業初年度である2020年度では、下記の質問に対する回答を自由記述で求めた。

今回の授業に対する質問や感想があったら記入してください。この項目は成績とは関係ありません。

2.3 解析方法

調査ごとに回答率を求めるとともに、回答文の文字数を集計した。また、自由記述文から「コロナ禍で頑張ったこと」の回答内容を分類して頻出度を求めた。前報では「卒業後の準備」「趣味」「学修環境の変化」「家族」「アルバイト」「国際感覚」「その他」に分け、そこから「遠隔授業の功罪」「外出自粛期間中の自己研鑽」「趣味への没頭と新たな挑戦」「学修意欲の向上」「生活様式の変化に伴う意識の変化」を読み取った。前報は2021年4月に実施した調査1のみを解析対象としたため、対象学年が卒業を控える3～4年生のみであった。一方、本報で追加した調査2は全学年を対象としているため、大学受験を控えた高校3年生のときにコロナ禍を迎えた1年生、入学早々コロナ禍のため遠隔授業を余儀なくされた2年生が含まれる。また、調査2～3では多くの授業が対面に戻り、行動制限も緩和されたことも調査1とは異なる。そこで、調査時期による回答の変化、学年比較、ひとり時間の過ごし方、自宅内か屋外活動かなどに注目し、前報で報告した調査1も再度集計をやり直した。

3. 回答結果

3.1 自由記述に対する回答率と文字数

図2に各調査の回答率と回答文の平均文字数を、図3に回答文字数の分布を示す。コロナ禍前である2017～2019年度の質問は「授業に対する質問や感想」であった。例年、同時に行った成績に関与する設問の回答率は高いが、成績とは関係ないこの質問だけは回答率は2～3割と低く、自由記述の文字数もさほど多くはなかった。しかし、遠隔授業が始まった2020年度では同じ「授業に対する質問や感想」の質問であったにも関わらず、回答率は4～5割と約2倍に、文字数は約1.5倍に上昇した。これは一見、遠隔授業に慣れて自然とキーボードに手が向いたためと考えがちだが、特に2020年4月は学生にとって初めての遠隔授業だったため、戸惑いの中で教員とのコミュニケーションを望んでいた可能性がある。

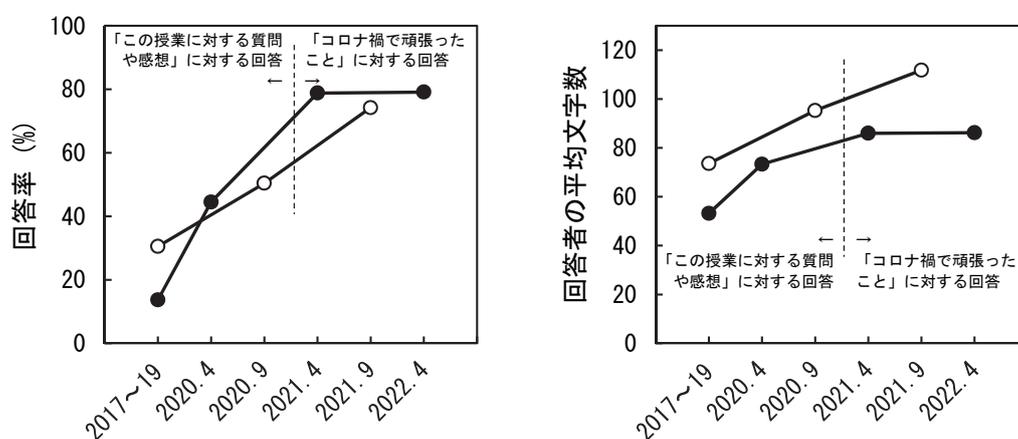


図2 成績とは関係ない自由記述への回答率と回答文の平均文字数
 ● 基礎防災学（3～4年生対象）、○ 現代を生きる（全学年対象）

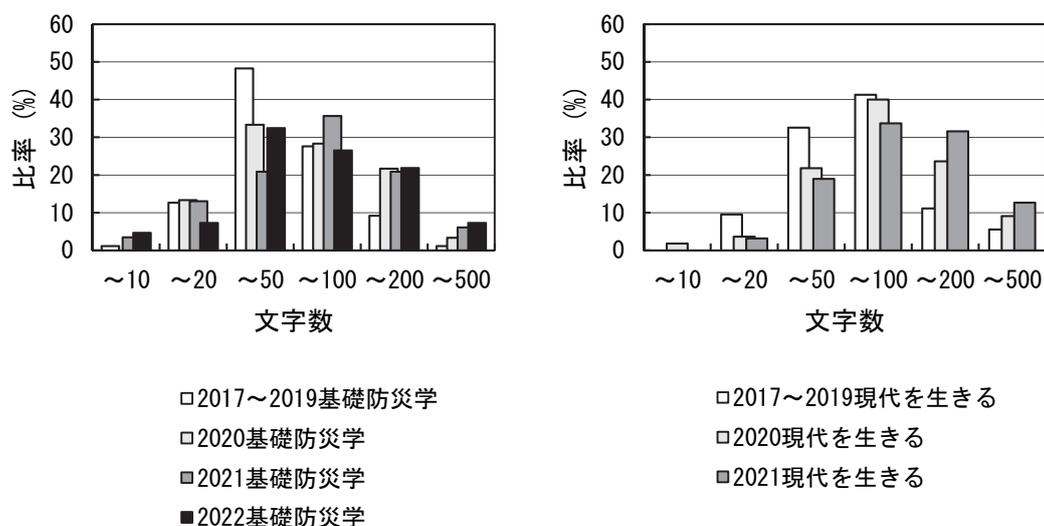


図3 回答文字数のヒストグラム

対面授業に戻った 2021 年度以降の調査 1～3 は「コロナ禍で頑張ったこと」に関する質問であったためか、回答率は約 8 割にまで上昇し、コロナ禍が 1 年半経過した 2022 年度においても下降する気配は見られなかった。回答文字数も多く、自分が頑張ったことに対して「多くを語りたい」「ぜひ聞いて欲しい」という気持ちが継続しているものと解釈される。なお、2 つの科目で若干数値が異なるのは、学年分布や学部比率が異なるためであろう。

3.2 回答内容の傾向

図 4 に、回答者の中での各カテゴリーの回答率を示す。ひとりで複数の項目を回答した者がいるため合計は 100%を超える。また、調査 2 は全学年を対象としているため、1 年生、2 年生、3～4 年生に分けて集計した結果も示す。これらの代表的な記述例を表 2 に紹介する。

ここでは前報とは異なり、「大学生生活の充実」をカテゴリーに設定し、調査 1 も新しい分類に沿って再集計した。これは、調査 1 のときは「遠隔授業という学修環境の変化に必死についていった」との内容の記述が多かったため「学修環境の変化への対応」として設定したが、その一部を「大学生生活の充実」に再分類したためである。また、調査 2～3 で「(卒業後のことではなく)残された短い大学生生活を有効にしたい、今できることをしっかりやりたい」という記述も多く、これらも「大学生生活の充実」に組み入れた。

調査全体の分布は、「卒業後の準備」「大学生生活の充実」「趣味・スポーツ」の合計で 85% を占め、これら 3 つはほぼ同数であった。

「卒業後の準備」は当然ながら 3～4 年生からの回答に多い。調査 1、調査 2 (3～4 年生)、調査 3 で経時変化を追うと、調査 1～2 では 4 割近くの 3～4 年生が卒業後の準備に力を入れたと回答したが、調査 3 では半減した。減少の内容は、資格取得が半減し、就職活動自体への行動が 1/4 に、卒業後の将来のことを考えるに至っては 1/10 まで減少した。ただし、パソコン技術の向上努力については維持していた。この現象は、コロナ禍 1 年目では遠隔授業の導入によって時間を大事にしようとする意識、新しい就職活動方法に対する危機感が強かったが、コロナ禍 2 年目になると対面授業に戻るとともに前年の就職活動を参考にできたため、危機感が遠のいてしまったことが原因と思われる。また、大学の再開により就職活動についてひとりで悩まず、教員や事務局が相談相手となったことも大きいといえる。

「大学生生活の充実」は、調査 1 では約 1/6 と少なかったが、調査 2～3 では約 1/3 と倍増した。最も大きな原因は、改めて自分と向き合ったり他人を頼りにしないなどの意識改革に関する回答が増えたからで、調査 1 では僅か 6%にすぎなかったものが、調査 2～3 では 3 倍に増えていた。調査 1 での回答が少ないのは、コロナ禍を 1 年経過した直後だったため、初めての遠隔授業に戸惑い、大学生生活を楽しもうとする余裕がなく、慌ただしい 1 年だったからだと思われる。反面、前述のようにこの 3～4 年生は、迫っている就職活動に関しては危機感を持っていたことになる。調査 2～3 で増えたのは、コロナ禍が 1 年半経過して、コ

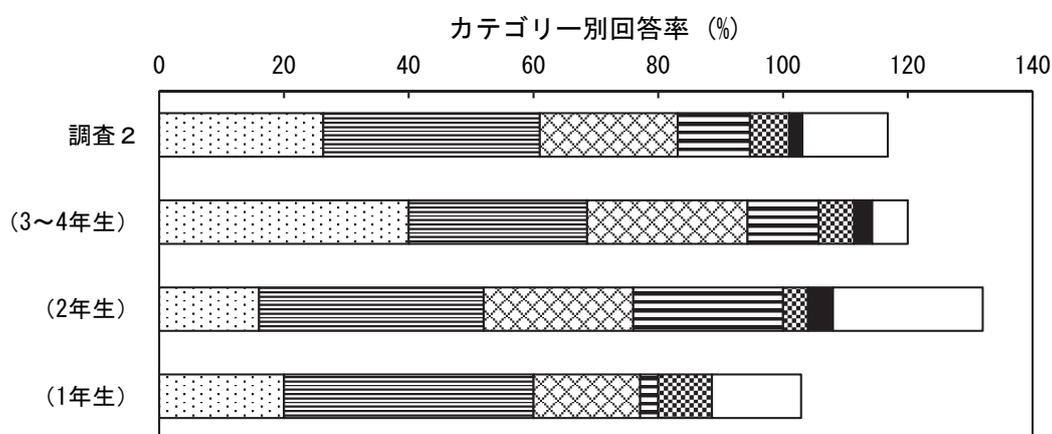
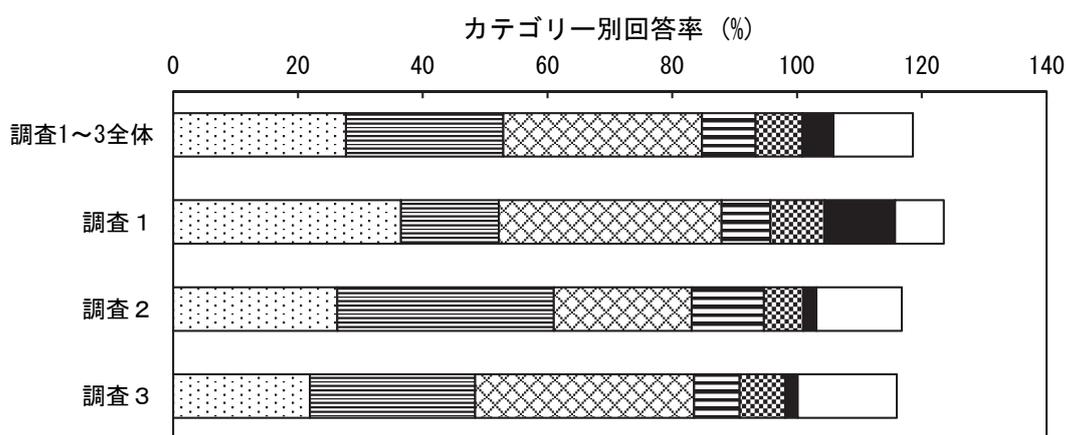


図4 「コロナ禍で頑張ったこと」に対する回答者を母数としたカテゴリ別回答率
ひとりで複数の項目を回答した者がいるため合計は100%を超える。

□卒業後の準備 ▨大学生生活の充実 ▩趣味・スポーツ ▤アルバイト
▣家族 ■遠隔授業の良さ □その他

コロナ禍生活が日常化したことが原因と推察される。なお、調査2における学年別集計では、若年ほどやや多い傾向が見られた。これは、1年生は高校時代にコロナ禍を迎えたこと、2年生は入学早々に遠隔授業となった学年であるため、大学生活へのあこがれが反映したのかもしれない。

「趣味・スポーツ」には全体の約1/3が力を注いでいた。なお、この集計には部活動は含まれていない。経時変化をみると調査2だけが少なく、対面授業に戻った後であるため学修関係に力を注いだとも考えられるが、減少の理由はよくわからない。別の観点として、コロナ禍の最中に趣味に力を入れたと回答した者の中で、新しい趣味を始めた者は意外と多く、1/3近かった。外出が制限され自宅でひとり過ごす中、新たな趣味を見つけたものと思われる。一方、インターネットで新しいグループに参加したり、家族と一緒に料理するなど、人

表2 各カテゴリーの回答事例

カテゴリー	主な内容
卒業後の準備	資格取得を目指した・取得した、プログラミングやタイピング技術が向上した、遠隔のため就職活動を活発にできた、将来をじっくり考える時間が持てた
大学生活の充実	自分と向き合う時間が取れた、他人に頼らずできるようになった、今やれることをやるよう意識した、制限がある中でも行動しメンタルが鍛えられた、苦手科目に挑戦した、部活動に集中できた、時間管理の大切さに気付いた、ICTの有効性に気づいた、他人とのコミュニケーションの大切さを知った、ひとりであることの大切さを知った
趣味・スポーツ	敬遠していた読書を始めた、興味がなかったアニメ・ドラマ・映画にはまった、料理を始めた、筋トレや未経験のゴルフや釣りを始めた、楽器を購入した、ファッションやイラストにはまった、ひとりで旅・ツーリングに行った
アルバイト	勤務時間が増えて昇格した・収入増となった、現場の改革を手掛けた、勤務日や人数が制限されたため新しいアルバイトに挑戦した
家族	親のありがたみを感じた、家族とゆっくりできた
遠隔授業の良さ	遠隔授業に力を入れた、時間を有効に利用できた、復習しやすかった、単位を取りやすかった
その他	地元に戻り旧友と交流できた、海外とのコミュニケーションに挑戦した、健康であることの価値を知った、感染予防の重要性を知った、起業や投資に興味を持った、コロナ禍に対する否定的意見

との交流を持ちつつ行った趣味も見受けられた。また、コロナ禍1年目こそ筋トレなどひとりで行う者が多かったが、外出規制が緩和されるにつれてゴルフや釣り、ツーリングやひとり旅など、感染を避けつつ外で楽しむ行動にシフトする傾向が見られた。さらに、楽器演奏に挑戦した者も数人見られ、コロナ禍でも楽しいおうち時間を送ろうとする気持ちが伝わってきた。なお、コロナ禍で楽器の売り上げが伸びているとの報道(朝日新聞DIGITAL 2020)もあり、経済活動との整合が認められる。

そのほか、「アルバイトに力を入れた」と答えた者は1割弱、「家族と過ごせて良かった」と答えた者も1割弱で、いずれも調査時期で大きな変化はなかった。また、遠隔授業の良さを感じて「遠隔授業に力を入れた」と答えた者も5%ほどおり、特に遠隔授業を1年間経験した直後である調査1では1割強が回答した。「その他」の項目は少数ずつではあるが、表

2 に記載したような回答が寄せられた。なお、コロナ禍に対する否定的意見とは、「ポジティブな経験はできなかった」「散々な一年だった」「引きこもった」「マスクはいやだ」などであった。

4. 考察

はじめに紹介した論文の調査時期はコロナ禍 1 年目の第 1～3 波の頃に相当し、遠隔授業や行動制限の真ただ中で、先のことが見えない不安やストレスを受けている状況での動向である。一方、本報は調査 1 が 1 年経過後の第 4 波、調査 2 が第 5 波収束時、調査 3 はコロナ禍 2 年経過後の第 6 波収束時であり、初期のコロナ禍下で頑張った成果を冷静に振り返ったときの回答とみなせる。そして、質問文は単に「コロナ禍で頑張ったこと」を尋ねただけであったにもかかわらず、回答率や文字数、具体的な説明文から「よくぞ聞いてくれた、自分の 1 年間の努力と成果をぜひ聞いて欲しい」という気持ちが滲み出ている。川原(2022)はストレス関連成長のプロセスに基づいて作成した 3 段階の質問事項への回答結果から、本格的に遠隔授業が行われていた第 2 波の時点で既に、ストレスフルな中でも適応したり乗り越えようとする過程でポジティブな変化が生じていることを示した。本報の調査結果は、コロナ禍が 1 年以上経過して正にその通りに行動変容が進んでいることを示している。

大学生活をより有意義に過ごしたいとの気持ちは、1～2 年生で強い。そこには友人とのコミュニケーションを望む記述が多く見られるが、逆にひとりぼっちを好む者もいる。讚井と吉田(2021)は、「ひとりぼっち」が人格的成長につながる肯定的側面を持つことを論じている。そこでは、他者を受容し、ひとりであることで自己の独自性に気づき、単独行動を嗜好する心理過程を論じている。その調査は初めての遠隔授業が始まった数か月後に、大学での友人関係を既に形成できている大学 3～4 年生を対象として行われており、入学早々に遠隔授業となり友人関係を形成するチャンスに恵まれなかった現 2 年生の成長が気になることである。なお、この状況は大学研究室内の教員・院生・卒論生といった異なる世代間にも想定され、コロナ禍前では年に数回は行っていた教員と学生との交流会がなくなったことから、円滑な研究活動、さらには就職後の職場での関係性に影響が出て来るかもしれない。

旅行について国枝(2021)は 2020 年 10 月に、コロナ禍が落ち着いた後の国内旅行への意図を調査し、田舎や農村に関心を持つ 20 歳代男性が周囲の理解を得ることで地方旅行に行く可能性が高いと予測していた。本報の調査では「コロナ禍で頑張ったこと」に対する回答として、ツーリングやひとり旅、あるいは旅行の意図が含まれると解釈できるゴルフや釣りを新しく始めた者が数人いた。これは、リスクを回避しつつ計画的に実行に移し、自身の行動力に自信を持ったゆえの発言と理解することができよう。

大学での遠隔授業のメリットとして、通学が不要になったりオンデマンド配信によって時間的余裕が生じることが当初から挙げられていた。内閣府の「新しいことへの挑戦や取組」の調査から 20 歳代の趣味に対する回答結果を拾うと、第 1 回調査(2020 年 5～6 月)では僅

差であるものの趣味が1位であったが、第4回調査(2021年9~10月)では教育・学習が1位、ビジネス関係の勉強が2位で、趣味は3位に転落している。本報の調査2の調査時期は内閣府の第4回調査と同時期で、減少傾向は似ている。これは、遠隔授業当初は突然の生活様式の変化により趣味に没頭した(せざるを得なかった)ものの、次第に自分を見つめ直して学業に時間を振り替えていった様子を感じ取れる。それでもおうち時間を過ごすために、ひとりでできる趣味を探し出し、それは自慢できるものであったことになる。この新しい趣味を探し出して選択実行したこと自体が、「ひとりぼっち」の効用と解釈できるであろう。

料理は多くの調査に登場するが、一人暮らしで料理に挑戦したという自慢話もあれば、「家族と一緒に」と併記して家族のありがたみを知ったと回答した者も多い。コロナ禍でもひとりで生きていく力を持っていることを自覚したという面と、家族とのつながりを再確認できたという面で、料理に二面性があることは興味深い。

調査1には見られなかった意外なものは「起業や投資」への関心である。これは、山本と樋口(2022)による2020年10~11月の調査にも表れていた。このような学生は、遠隔授業に適応しつつも生活変化は拒絶する、すなわち新しいICT技術を導入して以前の社会生活を取り戻そうとする意志が感じられ、今後の活躍に期待したいところである。

前報でも述べたように、本報で実施した「コロナ禍で頑張ったこと」に関する問いかけは、承認欲求を満たすものとして学生の成長に貢献できるものと考えている。ただし、依然として散々だったとの否定的意見を述べた者がおり、さらには未回答者も含めると全体の2割ほどがポジティブな経験を持たなかったのは残念である。他者の行動を知ることで自身の行動が活性化されることを期待したい。

5. おわりに

17世紀のペスト流行時にケンブリッジ大学は2年間閉鎖され、この間にアイザック・ニュートンは微分積分法、光学、万有引力の発見を成し遂げた(木原1994)。この論文執筆時にコロナ禍は2年が経過しており、ニュートンが経験した時間は過ぎた。我々を含め、学生たちは何を得たのか。コロナ禍はまだ続いており、結論を示す段階には至っていない。

大学生になったとたんにコロナ禍に巻き込まれた1~2年生は次回の調査でどのように変化するだろうか。我々が知る通常の大学生活をこの世代の大学生は経験していないため知る由もなく、何らかのモデルがあるわけではない。このコロナ禍でリモートによるコミュニケーションが発達し、多くの人を経験したため、旧来とはちがう生活スタイルに進歩するであろう。

参考文献

朝日新聞 DIGITAL (2021) おうち時間にギターが人気、市場も復活の兆し

<https://www.asahi.com/articles/ASP992HN7P91PLFA004.html> (2022年9月20日)

- 岩本晃典・下田泰奈（2022）新型コロナウイルス影響下における学生主体の地域活動の変化と今後：北九州市立大学地域創生学群 地域創生学研究 5, 13-32
- 川原正人（2022）コロナ禍での新しい生活様式におけるポジティブな変化：東京未来大学研究紀要 16, 135-139
- 木原武一（1994）天才の勉強術：新潮選書、新潮社
- 国枝よしみ（2021）消費者の観光行動に及ぼす COVID-19 の影響 —今後の地域観光の可能性を探る—：サービソロジー 7(2), 63-73
- 蘭紅艶（2022）新型コロナウイルス感染症の影響 —女子大学生を中心に—：福岡女学院大学紀要 国際キャリア学部編 8, 37-54
- 松本麻友子（2022）新型コロナウイルス感染症拡大による大学生の学習および生活習慣の変化：神戸親和女子大学研究論叢 55, 67-77
- 内閣府（2020a）新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/shiryo2.pdf> (2022年9月20日)
- 内閣府（2020b）第2回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result2_covid.pdf
(2022年9月20日)
- 内閣府（2021a）第3回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result3_covid.pdf
(2022年9月20日)
- 内閣府（2021b）第4回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result4_covid.pdf
(2022年9月20日)
- 内閣府（2022）第5回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result5_covid.pdf
(2022年9月20日)
- 中村周史（2022）コロナ禍における大学生の学習意欲に関する研究：総合政策研究 30, 59-67
- 讃井克英・吉田有希（2021）「ひとりぼっち」に関する社会心理学的研究 —「ひとりぼっち」の肯定的側面と否定的側面との区別—：同志社女子大学学術研究年報 72, 85-

- 重松幹二・コウハクル ワサナ・土山真未（2022）コロナ禍による遠隔授業期間中での大学生の自発的ポジティブ行動：福岡大学教育開発支援機構紀要 4, 1-15
- 田中共子・奥西有理（2021）コロナ禍への学生の否定肯定認識と気づきに関するテキストマイニングによる分析：岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 52, 29-39
- 山本圭三・樋口友紀（2022）変わりゆく学びのかたちに対する現代大学生の適応の諸相 — 新しい授業形態への適応とコロナ禍生活の受容に注目した計量分析 —：摂南大学教育学研究 18, 37-58
- 山根真紀（2022）新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大における学生の健康及び生活に関する調査報告(第2報) —前期調査(2020年5月)と後期調査(2021年1月)の比較—：日本福祉大学スポーツ科学論集 5, 53-65